

楠・荒田町遺跡

第40・41次発掘調査報告書

2 0 0 8

神戸市教育委員会

楠・荒田町遺跡

第40・41次発掘調査報告書

2 0 0 8

神戸市教育委員会

序

阪神淡路大震災から13年の時が経過し、神戸の町にも活気が戻り、忌まわしい震災の記憶が失われる事が問題となってきております。再び活気に満ちた神戸の街にも様々な過去の記憶が地下に残されています。これらの地下に残された過去の遺物や遺構は、現在の私たちに過去の記憶を取り戻す重要な手がかりとなります。

楠・荒田町遺跡は、中央区と兵庫区にまたがる広範な遺跡です。これまでの調査で、弥生時代前期～中期の集落址や古代末の源平合戦の舞台となる「福原京」関連の遺構も確認され、注目される遺跡です。

今回の調査は、遺跡の範囲では南西端に位置する地点であり、中心部から離れた周縁部がどのような環境であったかを知る資料が得られました。このような、一つ一つの記憶の断片を積み重ねることにより失われた過去の記憶がより鮮明に取り戻されていくものと念じております。

最後になりましたが、現地での発掘調査事業の円滑な推進ならびに報告書刊行にあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は神戸市兵庫区福原町32-18、32-19に所在する楠・荒田町遺跡第40次調査と神戸市兵庫区福原町32番9に所在する楠・荒田町遺跡第41次調査の発掘調査報告書である。
2. 第40次調査は、ホテル建設に伴う調査であり、工事の関係上、調査期間を二回に分け第40次-1調査と第40次-2調査として調査を行った。第41次調査は、マンション建設に伴う調査である。各調査の調査箇所と調査期間、面積は下記のとおりである。

第40次-1 調査	福原町32-18、32-19	平成19年5月16日～平成19年6月5日	約100m ²
第40次-2 調査	福原町32-18、32-19	平成19年8月21日～平成19年8月31日	約100m ²
第41次調査	福原町32番9	平成19年7月30日～平成19年8月21日	約200m ²
3. 現地調査は、第40次-1調査と第41次調査を川上厚志（文化財課調査担当学芸員）・第40次-2調査を佐伯二郎（文化財課調査担当学芸員）が行い、本書の作成は川上が行った。
4. 現地での遺構写真等については各調査担当者が行い、出土遺物の撮影は神戸市埋蔵文化財センターにおいて独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 牛嶋茂氏の指導の下、杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸首部」を、調査地点位置図は、神戸市都市計画総局発行の2,500分の1の地形図「神戸駅」「諒訪山」の一部を使用した。
6. 本書で使用した方位は座標北で、その座標は平面直角座標系世界測地系第V系で、標高は東京湾中等潮位(T.P.)で表示した。
7. 整理作業は、水洗・接合・復元は、埋蔵文化財センターにおいて実施し、遺物実測、図面の浄書は川上が行った。
8. 本書に関する出土遺物及び図面等の記録類は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成事業は神戸市文化財保護審議会の指導の下、以下の組織で実施された。

平成19年度神戸市文化財保護審議委員（史跡・考古担当）

檀上 重光 前神戸女子短期大学教（～平成19年7月14日）

工楽 普通 大阪府立狄山池博物館館長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	小川 雄二	埋蔵文化財調査係長	千種 浩
社会教育部長	黒住 章久	文化財課主査	丹治 康明
教育委員会参事	柏木 一孝	文化財課主査	安田 滋
(文化財課長事務取扱)		文化財課主査	山本 雅和
社会教育部主幹	丸山 謙	事務担当学芸員	阿部 敬生
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)		事務担当学芸員	中谷 正
社会教育部主幹	渡辺 伸行	遺物整理担当学芸員	黒田 恭正
(埋蔵文化財センター所長事務取扱)		保存科学担当学芸員	中村 大介

目 次

本文目次

第1章 はじめに	1. 遺跡の立地.....	1
	2. 歴史的環境.....	2
	3. 楠・荒田町遺跡の概要.....	4
	4. 調査区の設定と位置関係.....	8
第2章 第40次調査	1. 調査に至る経緯と経過.....	9
	2. 基本層序.....	9
	3. 調査の概要.....	11
	4. 出土遺物.....	11
第3章 第41次調査	1. 調査に至る経緯と経過.....	15
	2. 基本層序.....	15
	3. 調査の概要.....	17
	4. 出土遺物.....	17
第4章 ま と め	19

挿図目次

図1 楠・荒田町遺跡位置図.....	1	図10 第40次調査出土石製品.....	14
図2 周辺の主な遺跡(1/25,000).....	3	図11 第40次調査出土縄文土器.....	14
図3 調査地点位置図.....	6	図12 第41次調査南壁土層断面図.....	15
図4 調査区と位置関係図.....	8	図13 第41次調査遺構平面図.....	16
図5 第40次調査2区南壁土層断面図.....	9	図14 第41次調査出土土器.....	17
図6 第40次調査遺構平面図.....	10	図15 第41次調査出土石器.....	18
図7 第40次調査出土土器.....	11	図16 第41次調査出土石庖丁未成品.....	18
図8 第40次調査出土土製円板.....	12	図17 遺構平面合成図.....	19
図9 第40次調査出土石鋤、石錐他.....	13		

表 目 次

表1 楠・荒田町遺跡調査次数表.....	7	挿図写真1 浴場検出状況.....	11
----------------------	---	-------------------	----

写真図版目次

写真図版1 1. 第40次-1 2区全景(西南から)	写真図版4 1. 第40次上製円板
2. 第40次-1 2区南壁及び段落ち (北から)	2. 第40次石器類
写真図版2 1. 第40次-2 西半全景(北から)	写真図版5 1. 第41次南半全景(北西から)
2. 第40次-2 東半全景(南から)	2. 第41次北半全景(南東から)
写真図版3 第40次出土土器	写真図版6 第41次出土土器
	写真図版7 1. 第41次出土土器集合写真
	2. 第41次石器類

第1章 はじめに

1. 遺跡の立地

楠・荒田町遺跡は、昭和52年に地下鉄建設に伴い神戸市中央区楠町と兵庫区荒田町にかけて発見された遺跡であるため、地域住民と遺跡のつながりを考慮し、両町名をとって命名された遺跡である。

遺跡の範囲は、試掘調査や本調査の結果により北限は中央区馬場町、南限は兵庫区西多聞通までの南北約1km、東西約900mの広範な遺跡であることが判明している。遺跡の立地は、神戸市街地の北側に東西に連なる六甲山系から派生する丘陵端部の段丘上に存在し、北限では標高28m、南限では標高7mであり、南北に狭小な神戸市の旧市街地の山手から浜手にかけて傾斜しており、六甲山系から派生した尾根と谷地形が幾筋も刻まれた起伏の多い地形である。遺跡の西限には、明治31年に付け替え工事により埋め立てられた旧湊川（現在の新開地）が遺跡を区分している。また、東には独立丘陵である大倉山があり、北は六甲山系が存在し、四方を自然の要害に囲まれた地域である。この立地条件は、古代末に平家が都を移す理由の一つとされている。

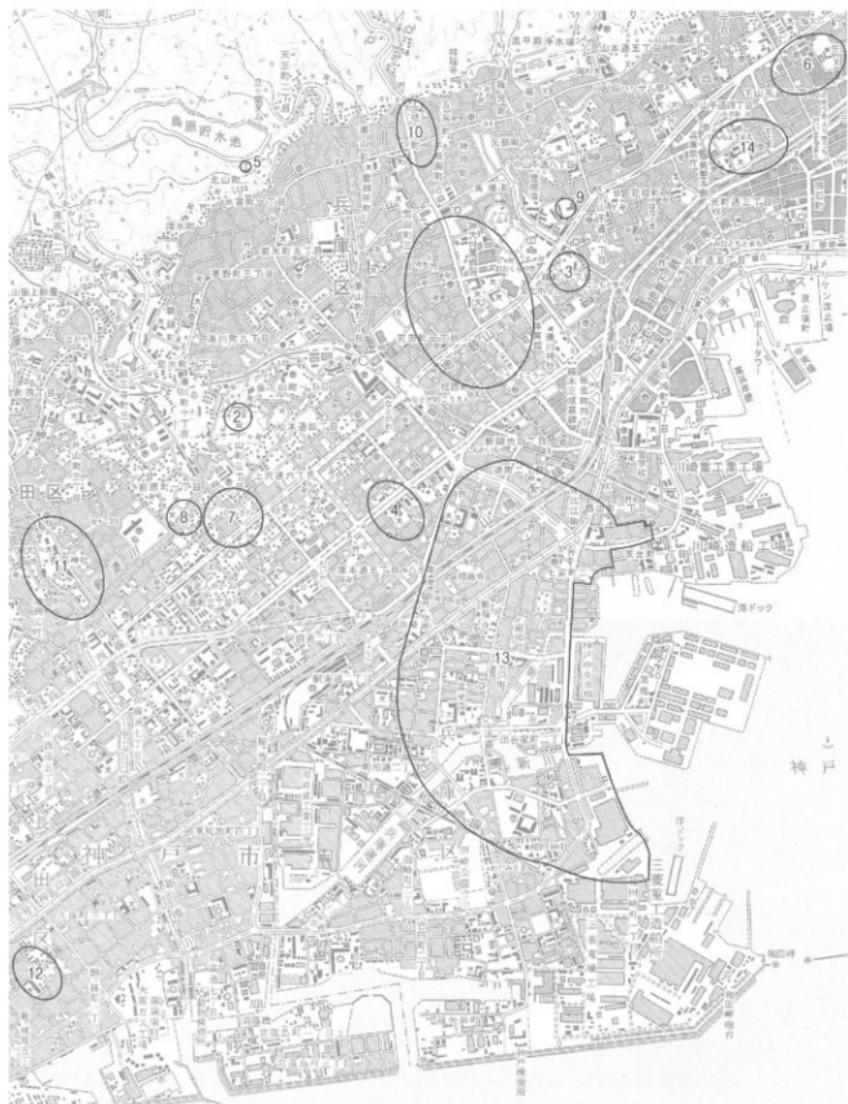
今回の調査地点付近は、遺跡の西端部にあたり、西へ200m程で旧湊川が流れる地点である。調査地周辺は、北側に主要地方道長田・楠・口尾線があり、西に存在した湊川も埋め立てられているため、盛上が多くなされているが、現状の地表面でも標高10mであり、遺跡の中でも地形としては低い地帯である。



図1 楠・荒田町遺跡位置図

2. 歴史的環境

- 旧石器時代** 楠・荒田町遺跡の周辺では、旧石器時代の遺跡として、発掘調査で発見された例はないが、^{※(1)}兵庫区会下山遺跡においてサヌカイト製の国府型ナイフ形石器が採集されている。
- 縄文時代** 中央区宇治川南遺跡では、縄文時代早期から晩期まで継続した上器型式が発見されており、当地域が早くから生活に適し、集落を営むに良い条件が整っていたことが窺われる。また、出土遺物の中には東北地方の上器型式のものや、九州産の黒曜石などが出土しており、古くから他地域とも交流があったようである。^{※(2)}いわゆる縄文海進期のピークを迎える6.000年前の海岸線は、JR元町駅付近から花隈あたりを経由して、^{※(3)}神戸駅北側の湊川神社付近より楠・荒田町遺跡の南端部から上沢通辺りまで湾入していたようである。
- 弥生時代** 弥生時代になると、楠・荒田町遺跡に集落の拠点が移動したようであり、前期から後期に至るまで安定して集落が営まれていたようである。楠・荒田町遺跡の南西600mにある人間遺跡では、弥生時代前期の環濠集落が発見されており、当時の海岸線からそう遠くないう所に集落が形成されている。^{※(4)}
- 古墳時代** 旧生田川以西、旧湊川までの地域で、盤主墳と考えられる古墳は、兵庫区夢野丸山古墳である。^{※(5)}扁平な板石積の堅穴式石室が確認され、重列式神獣鏡などが出土している。墳形は判然としないが、地形図などから前方後円墳と推定されている。集落としては、中央区生田遺跡で5世紀前半のカマドを持った方形の堅穴住居が確認されている。^{※(6)}兵庫区上沢遺跡では、古墳時代後期の玉類が多数出土している。
- 奈良時代** 新湊川が妙法寺川と合流する会下山トンネルに近い長田区室内遺跡では、明確な造構は確認されていないが、奈良時代から平安時代前半のものと考えられる軒丸瓦と軒平瓦、塑像製の仏像の台座が出土しており、当地域に白鳳期の寺院が存在する可能性がある。^{※(7)}
- 平安時代** 国風文化華やかな貴族の生活を知る資料として、園池を設け、建物の地鎮祭祀を行った造構が中央区下山手北遺跡で発見されており、平安時代に当地域においても雅やかな貴族が生活していた姿が窺われる。^{※(8)}
- 平安時代末** 平家の白頭に伴い遷都された福原京の所在地として、現在最も有力な遺跡とされているのが、楠・荒田町遺跡である。当遺跡の北に隣接してある祇園遺跡では、都より移住してきたと考えられる貴族の園池造構と大量の都風かわらけが出土している。また、博多、京都、鎌倉においてのみ数点の出土例がある、中国江西の吉州窑で焼かれた玳波天目小碗が出土しており、当時の日本の有力者が当地域に存在したことを裏付けている。^{※(9)}
- 鎌倉時代** 源平合戦以降の遺跡の分布は、当地から西に偏る傾向があり、集落址として長田区長田神社境内遺跡や二葉町遺跡が挙げられる。^{※(10)}^{※(11)}
- 南北朝期** 当地域は南北朝期、楠木正成の最期となる湊川の戦いの舞台となっている。しかしながら、その史実と関連するような造構遺物は発見されていない。旧湊川以前に形成された湿地帯がゲリラ戦を得意とした楠木正成が合戦の場所に選んだと考えられている。^{※(12)}
- 室町時代** 当地域の海岸線一体を占める兵庫津遺跡は、平清盛が修築した大輪田泊に面する造構が期待される遺跡であるが、現在のところ確認されておらず、室町時代以降の造構遺物が確認されている。文献資料として『兵庫北関入船納帳』でも確認されるが、港町として大変脈わっていたことが窺える。



1 楠・荒田町遺跡 2 会下山遺跡 3 宇治川南遺跡 4 大開遺跡 5 夢野丸山古墳 6 生田遺跡 7 上沢遺跡
8 室内遺跡 9 下山手北遺跡 10 祇園遺跡 11 長田神社境内遺跡 12 二葉町遺跡 13 兵庫津遺跡 14 花隈城

図2 周辺の主な遺跡 (1/25,000)

- 戦国時代** 港湾都市として魅力がある当地域は、各勢力が奪い合う地域となった。戦国末期には、花隈城が築かれ、海と内陸部をつなぐ拠点として重要な地域となった。文献記述として残る花隈城についても実態のわかる遺構遺物はわずかしか出土していない。
- 江戸時代** 織田信長の命により池田恒興・信輝父子によって花隈城を移築して兵庫津の中心となる兵庫城が築城された。その後は江戸時代を通して政府として兵庫城址が使用され、兵庫県庁が置かれるまで機能し続けた。近年の調査では兵庫勤番所の石垣の一部が確認されている。商人の町として繁栄し、幾度かの大火にも見舞われた焼土層や町家跡が発掘調査で確認されており、絵図や文献資料と対比できる資料が発掘調査で得られている。^{※(13)}
- 明治時代** 神戸開港以降、当地域は外国人居留地に隣接する地域となった。鉄道が開通し、駅周辺の開発などが急速に行われ、当地区には神戸駅開設に伴い高浜新田にあった福原蘿郭も当地点の西南^{※(14)}一帯に移転^{※(15)}となった。明治13年の内務省地理局測量課刊行の『兵庫神戸実測図』によると、当地点は田園地帯として描かれている。
- 大正時代** 旧湊川埋め立て事業によりできた「新開地」に興行施設が湊川神社などから移転し、周囲は繁栄を極めてきた。神戸市電気局（現在の神戸市交通局）による市営軌道事業も開始され、市電の駅も当地点近くに設置され、利便性の良い地区となった。
- 昭和時代** 外国人対象であった神戸洋家具業界も、庶民の需要に対し積極的に販売網を拡大するようになり、当地点においても家具販売店舗ビルが建設され、主要地方道長田・楠・日尾線沿いには湊川リビングストリートとして商店街が形成され、現在に至っている。^{※(16)}

参考文献

- (1) 新修神戸市史編集委員会『神戸市史』歴史編Ⅰ 自然・考古 1989年
- (2) 丹治康明『宇治川南遺跡』昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1987年
- (3) 斎口佳久『大岡遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会・財團法人スポーツ教育公社 1993年
- (4) 楠原本治『神戸市夢野丸山古墳』兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書 第二輯 兵庫県 1925年
- (5) 丸山 謙『生田遺跡』昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1990年
- (6) 斎木 崑・三輪名三『上沢遺跡 第8次調査』平成9年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2000年
- (7) 兵庫県埋蔵文化財情報「室内遺跡」「ひょうごの遺跡」27号兵庫県教育委員会 1997年
- (8) のじぎく文化財団『のじぎく文化財たより』第47号 1996年
- (9) 企画展示図録『播磨原京とその時代』神戸市教育委員会 1996年
- (10) 黒田恭正 編『兵庫市社境内遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1990年
- (11) 川上厚志 編『二葉町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001年
- (12) 盛合重信『兵庫の歴史』一古代から幕末まで 1995年
- (13) 阿部 功『天然の真珠へアーヴ！』『兵庫の埋蔵文化財講演会資料』兵庫県教育委員会 2007年
- (14) 清水靖夫編『神戸都市地図』柏書房 1995年
- (15) 人見佐知子『神戸・播磨近郊の成立と《近代公認制度》』『日本史研究』544 2007年
- (16) 新修神戸市史編集委員会『神戸市史』産業経済編 第二次産業 2000年

3. 楠・荒田町遺跡の概要

楠・荒田町遺跡の発見

昭和52年12月、市民の足として活躍していた市電の廃止以降、新たな都市交通として計画された地下鉄建設工事に伴う試掘調査が実施され、楠・荒田町遺跡が発見された。それに伴う本格調査が昭和53年に本市教育委員会により第1次調査として実施され、弥生時代前期末から中期初頭にかけての貯蔵穴30基、中期中葉の竪穴住居址、中期後葉の小口穴を有する木棺墓などが発見され、当地域の弥生時代の拠点集落であることが判明した。^{※(17)}

縄文時代以前の概要

第6次調査で、初めて縄文時代の遺構として縄文時代後期の土坑が検出された。第19次調査では、当遺跡でもっとも古いと考えられる縄文時代早期以前のサヌカイト製の擣杵形尖頭器が出土している。^{※(1)} 第16次調査では、縄文時代中期～後期の土器が出土し、後期以降の土坑と貯蔵穴が検出されて、遺跡内における集落の生活の一拠点が確認された。

弥生時代の概要

第1・5・6次の各調査において、弥生時代前期末から中期初頭にかけての40基におよぶ貯蔵穴をはじめ、中期前半から中頃の竪穴住居址や掘立柱建物址、中期後半の方形周溝墓、木棺墓が検出されており、弥生時代前期から中期の集落内での土地利用の差異がわかる資料が得られ、出土した土器は弥生時代前期～中期の当地域の基準資料となっている。また、第16次調査では、弥生時代中期の大規模な木構造の建物跡が検出され、周溝墓など集落景観を復元できるような資料が得られており、当遺跡が弥生時代の拠点集落であることを位置づける貴重な資料が数多く得られている。^{※(2)}

古墳時代の概要

第12次調査で、古墳時代前期の集落の存在を窺がわせる土坑やビットが検出された。第1次調査でも、6世紀前葉の竪穴住居が確認されたが、第30次調査で古墳時代後期の竪穴住居^{※(3)} 2棟と掘立柱建物が確認されるなど古墳時代の遺構検出密度が高くなることから、古墳時代での集落中心が、弥生時代に比べて北に移る様相が窺がえる。^{※(4)}

平安時代末以降の調査概要

昭和56年（1982年）には、神戸大学付属病院内の敷地で、病棟の増改築工事に伴う調査が神戸大学調査団により第2次調査として実施され、最下層の縄文及び弥生時代の遺物包含層の上面で平安時代末期の遺物とともに掘立柱建物の一部と、大規模な二重の堀が確認された。平家が遷都させたといわれる福原京と同時期の遺構がはじめて埋蔵文化財の発掘調査で明らかとなった。その後、同病院内での調査は兵庫県教育委員会により実施されており、平成15年（2003年）の調査では東西2間（3.6m）、南北1間（2.7m）の平安時代末の建物跡が検出された。この建物の柱穴は一辺約1mの方形で、柱穴の中には表面を丁寧に加工した礎盤石が据えられていた。この建物は、建築構造の見地から「櫓」に想定されると考えられている。また、第2次調査で確認された2重の堀の続きを検出しており、堀の断面形状の違いから屋敷地を区画する薬研堀と都市を区画する箱堀の2種類の境界及び防御の堀であることが指摘されている。^{※(5)}

参考文献

- (1) 丸山 澄『楠・荒田町遺跡』『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989年
- (2) 兵庫県教育委員会『楠・荒田町遺跡』一神戸大学付属病院構内遺跡-- 1997年
- (3) 丸山 澄『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980年
- (4) 黒田恭正『楠・荒田町遺跡 第11次調査』『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1993年
- (5) 岩本宏明・池田 疎・橋詫清孝『楠・荒田町遺跡』『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992年
- (6) 阿部 功『楠・荒田町遺跡 第30次調査』『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992年
- (7) 兵庫県教育委員会『楠・荒田町遺跡』一神戸大学付属病院構内遺跡-- 1997年

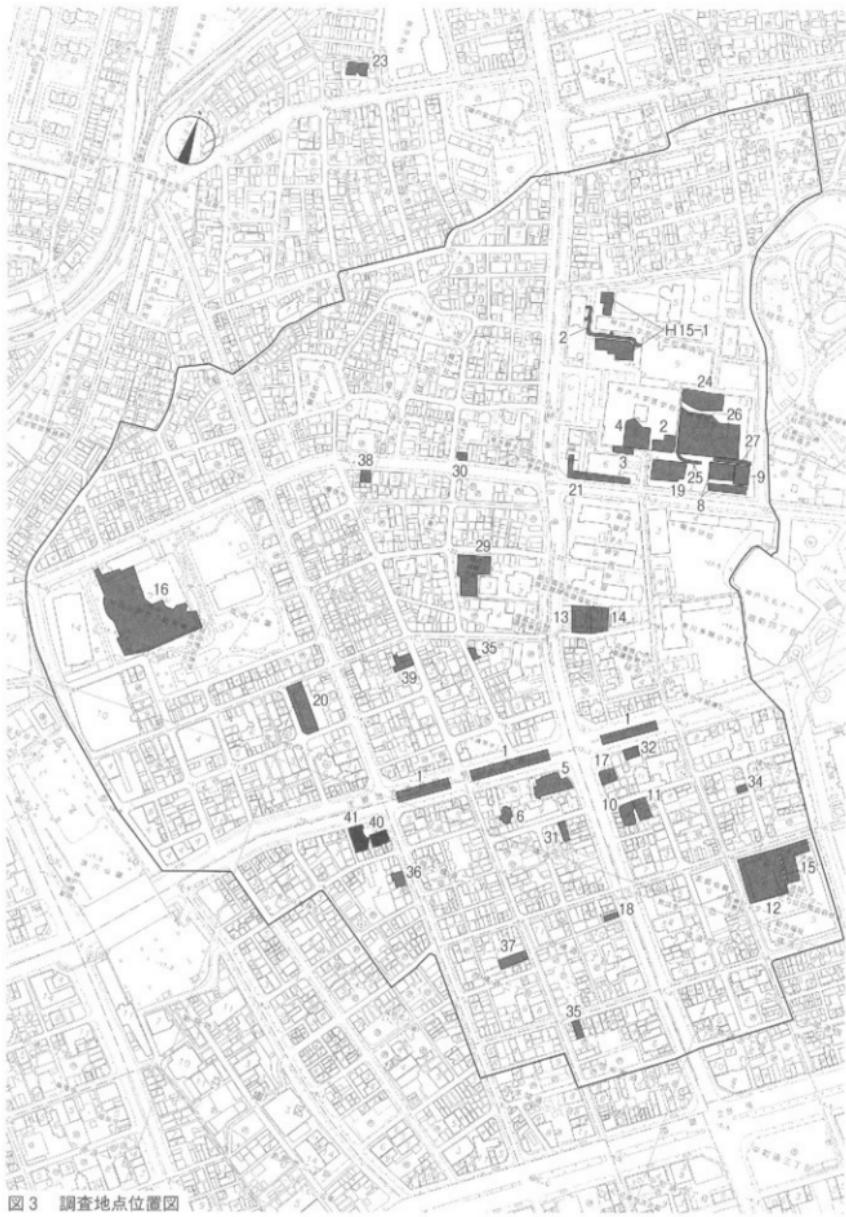


図3 調査地点位置図

次数	調査主体	調査日	開始日	土 壤		なま	1/4 地盤
				面積(m ²)	深度(cm)		
1	神戸市教育委員会 神戸市立学校委員会	1,000	1978/10/3	1979/3/31	学生時代前期・中期の住居跡、溝、ビット、塗、鋼錆の跡類、土器		
2	兵庫県教育委員会	530	1982/7/12	1982/8/31	平安時代、溝、柱穴		
3	兵庫県教育委員会	135	1982/9/17	1984/10/30	平安時代、溝、柱穴		
4	兵庫県教育委員会	780	1985/5/20	1985/7/4	平安時代末～鎌倉時代初期、石組溝、掘立柱建物		
5	神戸市教育委員会	700	1985/8/20	1985/9/30	学生時代、町屋穴(6基)、掘立柱建物、上塗、溝		
6	神戸市教育委員会	260	1986/10/21	1986/12/13	鳥文時代、町屋穴(後期)、学生時代、岩城穴(前期)、方形周溝羨(中期)		
7	兵庫県教育行政会議	879	1987/7/22	1987/8/20	平安時代、溝、柱穴、十塗、鎌倉時代の井戸、溝		
8	兵庫県教育委員会	323	1987/10/12	1987/10/16	平安時代末～鎌倉時代、土塗器、古墳時代中期の豊穴住居跡		
9	兵庫県教育委員会	196	1989/2/2	1989/2/27	中世の人溝、溝、柱穴		
10	福井市立博物館・美術館	170	1989/4/11	1989/4/28	平安時代、溝、柱穴、学生時代の豊穴、ビット		
11	神戸市教育委員会	1,900	1989/9/18	1989/12/16	古墳時代前期・中期、平安時代後期～鎌倉時代、溝		
12	神戸市スポーツ教育普及公社	200	1990/4/3	1990/4/18	平安時代、溝		
13	神戸市教育委員会	580	1990/6/1	1990/7/20	平安時代の土坑		
14	姫路市龍野町調査委員会	640	1990/8/20	1990/10/3	古墳時代、上塗、ビット		
15	神戸市スポーツ教育公社	4,800	1992/5/7	1993/5/23	学生中期、掘立柱建物、塗構・溝、上塗、礎文後期の上坑		
16	神戸市教育委員会	40	1992/5/28	1992/6/28	学生中期、方形周溝羨		
17	神戸市立女子大学歴史調査研究会	160	1992/5/13	1992/6/14	時期不明の大溝、中世の上坑、サコロ・ビット		
18	神戸市立女子大学歴史調査研究会	1,251	1992/7/7	1992/10/30	鶴文時代早期の尖頭器・石鏃、奈良後半の十塗、溝		
19	兵庫県教育委員会	495	1994/6/23	1994/7/15	平安時代中期、馬糞堆、第4号		
20	兵庫県教育委員会	392	1994/10/24	1994/12/7	鎌倉時代、柱群、井戸		
21	兵庫県教育委員会	396	1997/2/4	1997/3/25	鎌倉時代、柱穴、溝		
22	神戸市教育委員会	140	1997/2/12	1997/3/17	近世の井戸、上坑		
23	兵庫県教育委員会	525	1998/2/9	1998/3/19	平安時代、柱穴、溝		
24	兵庫県教育委員会	21	1998/8/10	1998/8/12	平安時代から鎌倉時代の施上の溝、小溝、掘立柱建物、十坑、井戸		
25	兵庫県教育委員会	3,047	1998/11/20	1999/3/25	平安時代から鎌倉時代、溝		
26	兵庫県教育委員会	18	1999/3/29	1999/3/29	平安から鎌倉時代、溝		
27	兵庫県教育委員会	350	1999/4/12	1999/4/21	学生時代、塗構、井戸、近世		
28	兵庫県教育委員会	942	1999/10/19	1999/12/27	学生時代の土坑、中世の溝		
29	神戸市教育委員会	86	2001/9/4	2001/9/28	学生時代中期のビット、古墳時代後期の豊穴居跡2種、掘立柱建物1種、ビットを検出した。		
30	神戸市教育委員会	60	2003/4/9	2003/4/16	古墳時代の溝、学生時代中期の溝		
31	神戸市教育委員会	764	2003/8/4	2003/12/17	平安時代末～鎌倉時代末の井戸	一重掘	
32	神戸市教育委員会	200	2004/4/21	2004/5/31	平安時代末の豊穴住居、平安時代中期後半の丸窓加溝、豊穴住居、須恵器輪、弦生、上器		
33	神戸市教育委員会	53	2004/9/2	2004/9/6	時期不明のビット・十坑		
34	神戸市教育委員会	60	2005/7/28	2006/8/4	学生時代の溝、生穴、中世の溝2条・落ち込みみ1基・柱穴13基		
35	神戸市教育委員会	100	2005/8/18	2006/8/29	12～13世紀の柱・柱穴、柱穴・十坑		
36	神戸市教育委員会	140	2006/8/25	2006/9/16	鶴文～源氏の溝跡、平安時代・室町時代の掘立柱建物、井戸、上坑		
37	神戸市教育委員会	230	2006/4/20	2006/12/19	鎌倉時代～元亨時代の掘立柱建物、井戸3基、柱穴		
38	神戸市教育委員会	80	2006/4/24	2007/5/8	古墳時代後期の豊穴住居		
39	神戸市教育委員会	138	2007/5/21	2007/5/22	学生時代、古墳時代の施路、ビット		
40	神戸市教育委員会	150	2007/8/21	2007/8/31	学生時代、古墳時代の施路、ビット		
41	神戸市教育委員会	180	2007/8/22	2007/8/31	学生時代、古墳時代の施路、ビット		

注：7次については久畠
表 1 桥・荒田町遺跡調査次数表

注：2次調査地は調査完了後、道路拡張から除外。
2003(平成15年)兵庫県教育委員会の調査は次敷涵れのため、H-15-1と表記した。

4. 調査区の設定と位置関係

今回報告する第40次調査地と第41次調査地は隣接している。北側が主要地方道長田・楠・日尾線に面しており、東側が歓楽街として有名な柳筋に面しているのが第40次調査の地点であり、その西隣が第41次調査の地点となっている。

調査時期もほぼ同じ期間に行うために調査の進捗にあわせて、お互いのバックスペースとして使用した。

第40次調査は、全体を調査した後に埋め戻した脆弱地盤では、杭打ち用の大型重機が作業できないため、コンクリート杭の基礎工事を先行して行うこととした。杭の基礎範囲は、建設予定範囲の南辺と北辺に東西方向の幅3m、長さ18mの範囲であったため、南側のトレーナーを第40次-1調査の1区とし、北トレーナーを2区として調査を行った。第40次-2調査の調査は1区と2区の間の調査であり、3区として調査を行った。

第41次調査は、第40次調査地の杭基礎設置工事が開始されており、調査のバックスペースとして使用できなかったため、第41次調査地内でバックスペースを確保する必要があることから、調査地全体の南側3分の2を先行して調査を行い、残土については北側から撤出した。残り北側3分の1は、調査が終了した南側へ残土を反転掘削して調査を行った。

以下、調査内容については、次数ごとに章を改めて報告を行う。



図4 調査区と位置関係図

第2章 第40次調査

1. 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯 第40次調査の地点は、歓楽街として有名な福原柳筋の北門西側であり、第1次調査の最西端が北東方向にあたる地点である。当地に、ホテル建設が計画されたため、平成18年3月14日に試掘調査を行った。その結果、現地表下約1mで遺物包含層を確認し、工事の影響により損壊する範囲に限り発掘調査の実施が決定された。調査に際し、事業主である和田興産株式会社と埋蔵文化財発掘調査にかかる契約を締結し、費用についても事業主の協力を得た。

調査の経過 調査は、建設計画上、独立基礎に伴う杭の設置が先行されるため、調査区の北と南に幅3mのトレーニングを第40次-1として行い、調査終了後に基礎工事を行った後、両トレーニングの間を第40次-2として調査を行うこととした。

調査区は、駐車場として利用されていた跡地であるため、全面にアスファルトに覆われた状態であった。そのため、調査対象範囲の周囲をコンクリートカッターにより切断した後、重機によりアスファルトの除去、盛土、搅乱上の掘削を行い、残土は西に隣接する同一事業者による第41次調査区予定地に仮置きし、調査終了後埋め戻すこととした。重機による掘削の後、人力による遺物包含層の掘削と遺構面検出、遺構掘削を行った。検出された遺構や断面図については、S = 1/20の図面を作成した。基準点に関しては測量業者によって世界測地系と日本測地系の座標点の設置及び、東京湾中等潮位(T.P.)による水準の取り付け作業を行った。写真撮影は大型カメラと中型・小型カメラ・デジタルカメラを使用した。

2. 基本層序

商店街と歓楽街に面した土地であるため、後世の開発などで全体に擾乱が著しく、上層はほとんどが盛土や搅乱による層である。その下層には暗灰褐色細砂質シルトの遺物包含層、黄褐色極細砂シルトの遺構面がある。上層観察には、比較的土層堆積が良好に観察できる第40次-1の2区南壁を使用したが、1区では流路が大半を占めているために、安定した層序は観察できなかった。

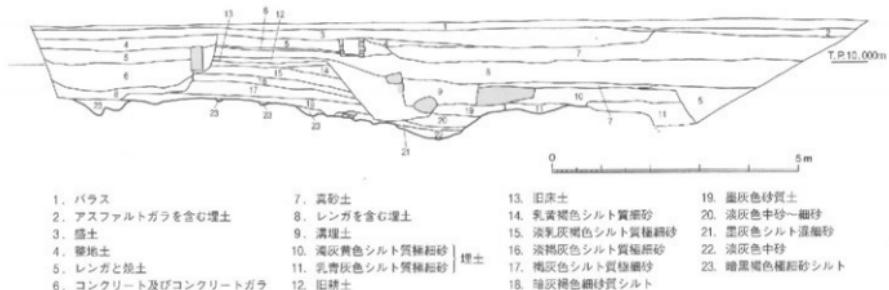


図5 第40次調査2区南壁土層断面図

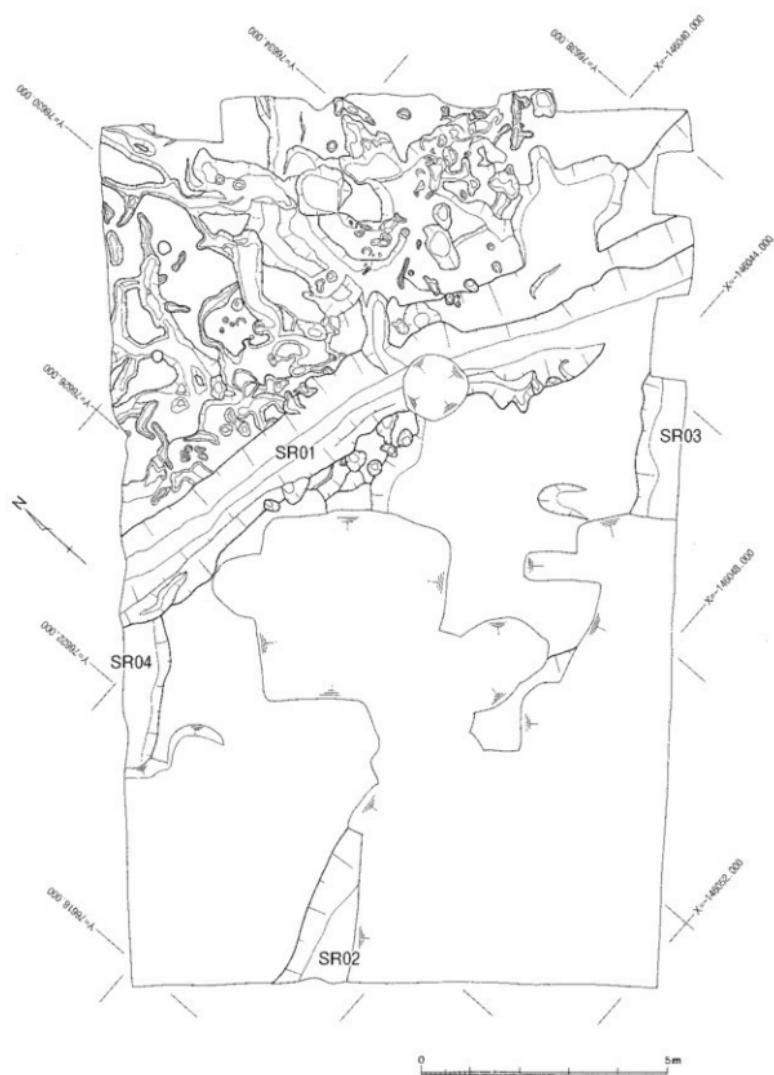


図 6 第40次調査遺構平面図

3. 調査の概要

遺構

第40次調査については、調査区を3区分2回に分けて調査を実施したため、狭小な範囲での調査となった。そのため、広い範囲での遺構面の検出はできなかつたが、北部に安定した遺構面があり、南半は流路及び湿地としての不安定な地勢であった。

遺構は、顕著な人為的なものは少なく、小さなビットと不定形の土坑を極僅かに検出するのみであった。北部に一段上がつた遺構面上では、雨水が流れた跡と考えられる幾筋もの蛇行する小さな溝が検出され、それらは南半分にある流路及び湿地に流れ込んでいる様相が見受けられる。流路(SR01)がほぼ正確に座標軸の東西方向に調査区を横断しており、この流路が北側の一段上がつた安定した遺構面が存在する地点と不安定な地点との境界を画している。

この自然地形での段差は、昭和に至るまで存在し、その段差により土地利用が画されていたようである。

南側の一段下がつた場所には現代の井戸と煙突、ボイラー室や小さく区切られた浴室が搅乱として確認されており、流路上にはレンガ造りの側溝が設けられていた。

4. 出土遺物

出土遺物のほとんどは、南側の流路もしくは湿地状になった地点で出土しているが、流路の堆積や湿地堆積が複数あり、時期を判別しながら各流路を調査することができなかつた。北半の遺構面上では、中世の須恵器碗なども出土している。また、SR01の肩では古墳時代の小型丸底壺と共に弥生土器も多く出土しているが、周辺の状況から見て、古墳時代に弥生時代の遺構などを削って流されてきたものと思われる。SR01の更に南には何層にも重なる流路が存在するが、弥生時代よりも新しい様相は見られない。

(図7-1)は東播系須恵器の碗で、底部は回転糸切りの平高台部が若干残り、内湾気味に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。12世紀頃のものと考えられる。



挿図写真1 浴場検出状況

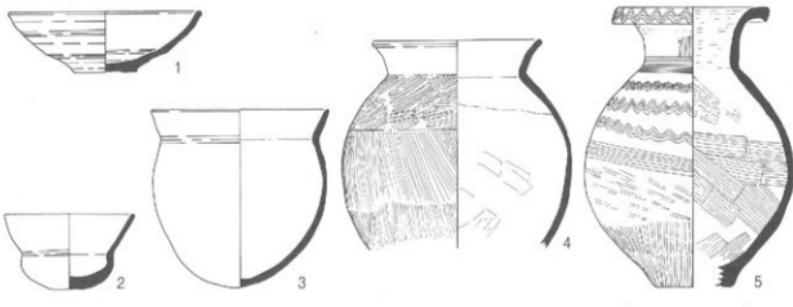


図7 第40次調査出土土器

(図7-2)は小型丸底壺で、SR01の肩から出土している。比較的平らな底から大きく広がる口縁部をしている。

(図7-3)は土師器の壺である。SR04から出土した。底部は尖り気味の丸底で内面底部は指で押されたのみの調整である。口縁部は横方向のナデを施し、その他は不正方向のナデ調整である。

(図7-4)は土師器の壺である。調査区ほぼ中央のSR01の底で出土した。体部上半は叩き調整で、体部中央は綫方向の刷毛目調整、体部下半は板状工具による綫方向のナデ調整を施している。この3点は5世紀後半のものと考えられる。

(図7-5)は広口壺である。SR02の底に張り付くように出土した。口縁端部面には、波状紋を巡らし、頸体部境には5条の凹線紋を施している。体部は上から順に3条の波状紋、体部張り出し頂部には3条の凹線紋が施されている。体部下半は右下方への範磨き調整と底部付近では綫方向の範磨き調整を施している。弥生時代中期初頭のものと考えられる。

土製円板

土製円板については、装飾品や紡錘車あるいは祭祀に使われるものなど、様々な説があるが、今のところ用途が判然としない遺物の一つである。

今回出土した土製円板は、包含層や流路から出土したもので、図化した9点を確認している。最も小さいもの(図8-4)は、径2.5cm、重さが5.65g、最も径が大きいもの(図8-2)は、径5.5cm、最も重いもの(図8-7)は、重さが41.16gと様々である。

すべて土器片を打ち欠いて作成されたもので、もとから円板を作成する意図で焼成前から作られたものは見られない。ただし、縁辺部は擦られたように滑らかである。(図8-1)の表面には凹線紋と斜格子紋を線画している。また、(図8-2~6)の表面には刷毛目調整が施されている。(図8-7)は厚みがあり、片面には緩やかに内湾する彎曲がある。また、その反対面は平らな面であることから土器の底部を使用したものと考えられる。底面となるであろう平らな面の周縁部は角を落とすように削り取られている。概ね、弥生時代前期末から中期初頭にかけてのものと考えられる。

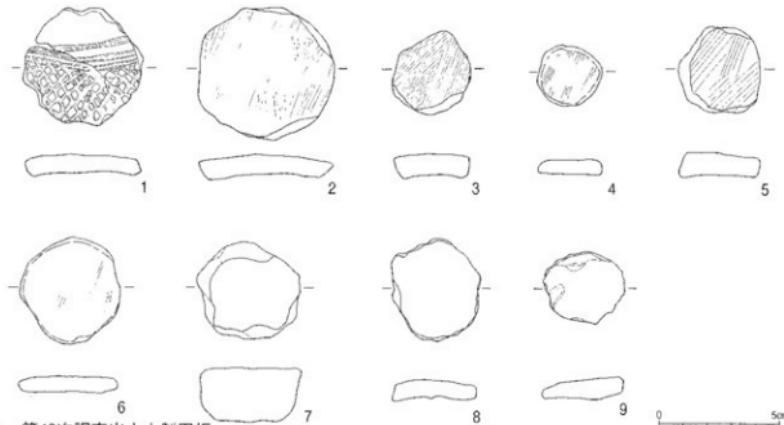


図8 第40次調査出土土製円板

石鎚

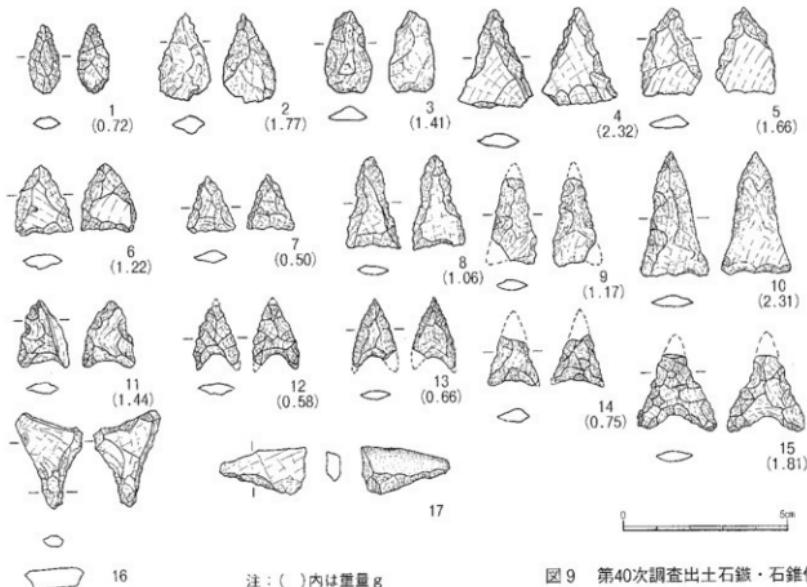
右鎚と認定できたものは、全部で15点である。すべてサスカイトの打製である。(図9-1)は尖基式、(図9-2・3)は円基式、(図9-4～7)は平基式、(図9-8～15)は凹基式である。調整は、表裏両面とも全面を覆うものと、大剥離面を残すもの(図9-4～6・8)がある。(図9-3)は表面に細かな調整が少なく平坦であるため、断面が三角形を呈している。流路や遺物包含層の出土であるため、時期を限定し得るものはないが(図9-12～15)は、丁寧な調整とその形態から縄文時代に属する可能性がある。

石錐

(図9-16)は唯一、石錐と確認されるものである。サスカイト製であり、頭部と錐部はさほど明瞭に判別はできないものの、頭部と錐部に屈曲が見られ、錐部の断面は丸い形状を呈している。

石器

(図9-17)は器種名が決められないものであるが、片面には大剥離面を残し、反対面は自然面を残している。一辺を細かく調整し、刃部を作り出している。いわゆる刃器としては、小さく、刃部も鋭さがないため、用途については不明とせざるを得ない。



注：()内は重量g

図9 第40次調査出土石鎚・石錐他

石磨丁未成品 (図10-1)は周縁部を余すことなく打ち欠き、石磨丁としての形態をほぼ整えた状態のものである。直線辺に刃を設けようとしており、湾曲部には比較的大雑把な仕上げとなっている。裏面については、研磨されたような痕跡がないため、厚みに関してはもう少し薄く仕上げる仕様と考えられる。最大幅は9.2cmを測る。石種は、緑色結晶片岩であり、比重は2.844である。

砥石

(図10-2)は凝灰岩製の砥石である。三面に使用した痕跡があり、比較的滑らかであることから仕上に近い砥石として使用されたと考えられる。

その他

(図10-3・4)は一側縁に刃部を作り出していることから、刀器とも考えられるが、刃部を作り出すのに細かな調整がなされていないため、石器製作時の薄片とも考えられる。

(図10-5)は石核から剥ぎ取った大剥離面を持つものであるが、発掘調査時による欠損が付いている。(図10-6)は石核から剥ぎ取った大剥離面を持つ大型のもので、幅5cm、長さ7cmを測る。(図10-7)は表面縱方向に細かく剥ぎ取った痕跡があることから石核と考えられる。その他、図化していないが、多くのサスカイトの剥片が出土しており、土壤を持ち帰り、洗浄調査した場合は更に大量の剥片が見つかったものと考えられるが、今回の調査では土壤洗浄まではおこなわなかった。

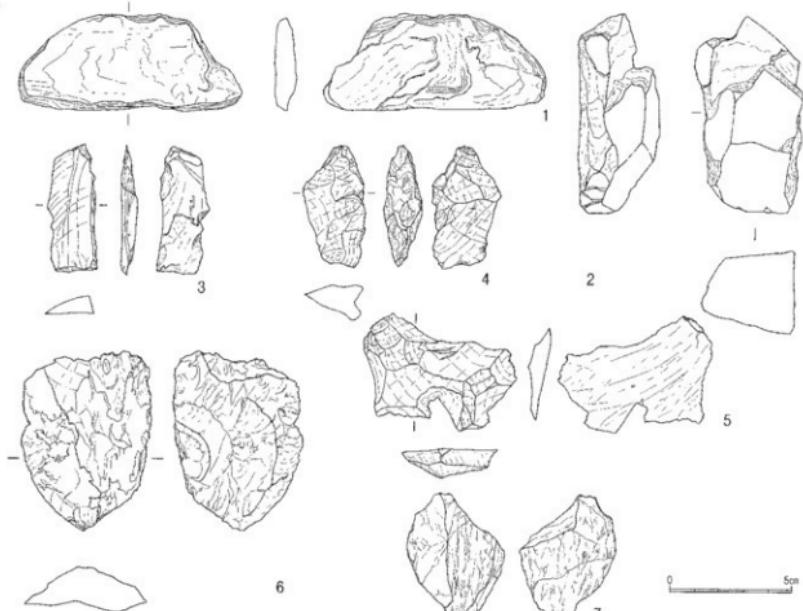


図10 第40次調査出土石製品

縄文土器

純文土器とわかるものが唯一、調査区中央北側の流路(SD01)の北肩から出土している。

(図11)は波状口縁の一部で、口縁部に沿って1条の沈線紋が施されており、内面にも同様に口縁部に沿って1条の沈線紋が施されている。胎土には、1~2ミリ大の小石を含んでいる。色調は淡褐色を呈している。口縁内面の調整痕の渋曲から立ち上がりが浅いと推測される。このことから、器種は浅鉢と考えられる。内面にも沈線を施す同様のものは縄文時代晩期でも比較的古い段階のものと考えられる。



図11 第40次調査出土縄文土器

第3章 第41次調査

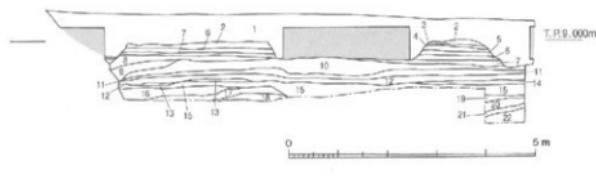
1. 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯 第41次調査の地点は、第40次調査地の西隣りにあたる。調査開始直前は更地となっていたが、以前は家具量販店の鉄筋コンクリート造のビルが建っていた地点である。当地に、マンション建設が計画され、従前建物の基礎などで既に遺跡が大きく損壊している可能性があったため、平成19年1月9日に試掘調査を行い、損壊の程度や残存状況の確認を行った。その結果、従前建物の基礎と基礎の間には埋蔵文化財を含む層が残存しており、南側の従前建物増築部分は、現状で北側から約1m低い段差となっていたが、盛土が薄いだけでその下には埋蔵文化財が残存していることも判明した。工事による影響は、従前建物の基礎撤去を含めて全面に及ぶため、建設予定地全面の発掘調査が決定された。調査に際し、事業主である和田興産株式会社と埋蔵文化財発掘調査にかかる契約を締結し、費用についても事業主の協力を得た。

調査の経過 事前に従前建物の地中梁など、盛土内に収まる埋設物や土を施工業者により除去が行われた後、独立基礎を残した状態で調査を開始した。調査にかかる残土は半分を処分する事とし、残りの残土については調査区内で仮置きし、反転掘削する事とした。重機掘削の後、人力による遺物包含層の掘削と遺構面検出、遺構掘削を行った。検出された遺構や断面図についてはS=1/20の図面を作成した。基準点に関しては測量業者による世界測地系と日本測地系の座標点設置、東京湾中等潮位(T.P.)による水準の取り付け作業を行った。写真撮影は大型カメラと小型カメラ・デジタルカメラを使用した。

2. 基本層序

北側は厚い盛土がされていたが、従前建物の独立基礎が大きく2列に並んでいるためほとんどが搅乱層である。南側の一段下がった地点は、旧耕土層も残存しており、比較的良好な土層観察ができたため、調査区の南壁断面を使用した。上層は盛土及び搅乱、旧耕土層があり、その下層は砂質土層と砂層の互層であり、南断面は流路のみの堆積となっている。調査区の北壁には、搅乱直下に黄褐色極細砂シルトの遺構面が僅かに観察できる。



- | | | |
|-----------------|----------------|--------------|
| 1. 盛土 | 7. 灰色中砂 | 13. 乳白色シルト |
| 2. 旧耕土 | 8. 明褐色砂質土 | 14. 乳青灰色シルト |
| 3. 旧床土 | 9. 淡褐色細砂 | 15. 暗褐色粘土 |
| 4. 乳褐色シルト質細砂 | 10. 黄褐色砂質土 | 16. 青灰色中砂～細砂 |
| 5. 灰褐色粘質土 | 11. 明青灰色極細砂シルト | 17. 乳褐色粘土 |
| 6. 明灰褐色粘質土(含包層) | 12. 乳褐色シルト質細砂 | 18. 淡灰色中砂 |

図12 第41次調査南壁土層断面図

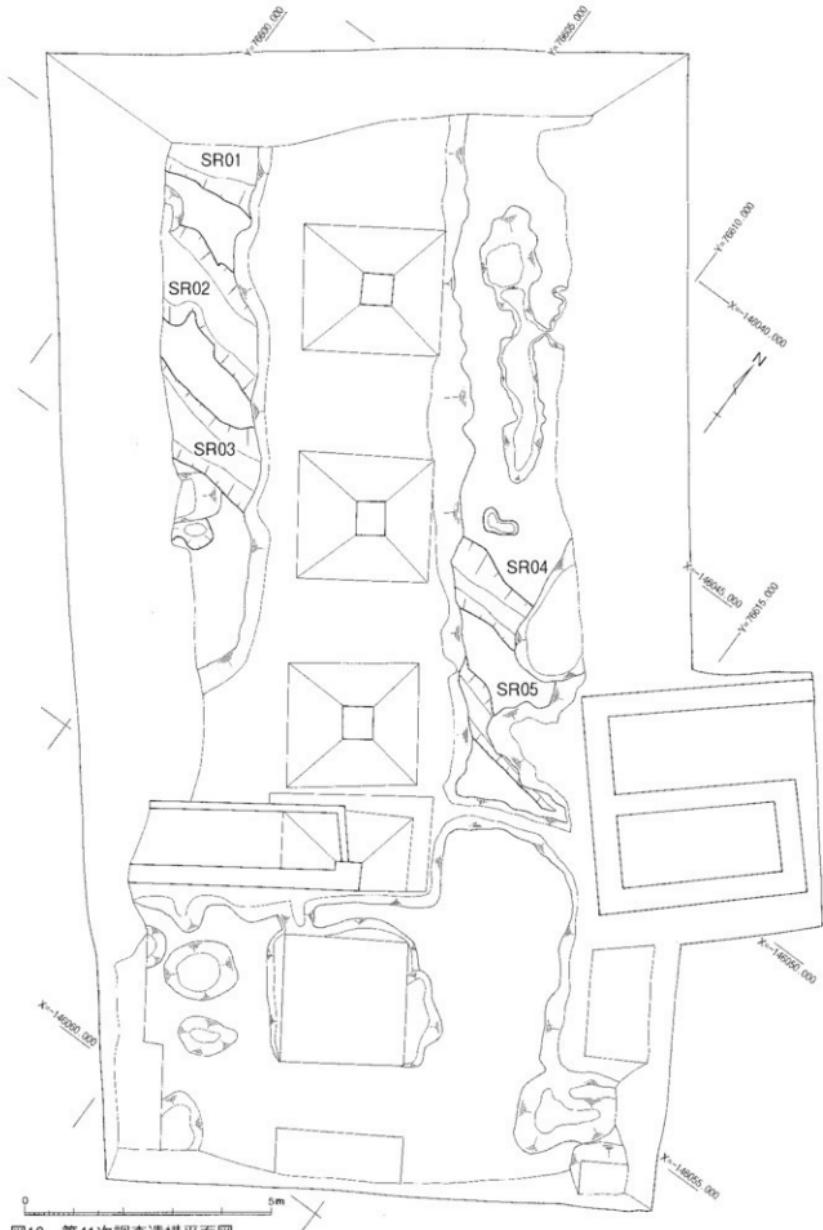


図13 第41次調査遺構平面図

3. 調査の概要

調査に伴う残土を搬出する作業地として、調査区全体の北側3分の1を残し、南側を先行して調査を行い、残りの北側の調査は調査が終了した南側に反転して行うこととした。従前建物の巨大な独立基礎の間を縫うよう遺物を含む層が残されており、人力掘削は非常に過酷なものとなった。

一段下がる南側の敷地は、黄褐色砂質土で比較的安定した面だったので精査を行ったが、人為的な造構は見当たらなかった。その下層は、砂質土と砂層の互層となっており、各層から流れ堆積による遺物が出土した。当調査地の南側は流路及び湿地へと続く不安定な地勢であることが窺がえる。

調査区の西端から座標軸の東西方向に、調査区を斜めに横切るように3条の流路を検出した。この流路は第40次調査で検出した流路と同様の堆積をしており、北端の流路SR01から北は一段高くなっている、安定した造構面が存在している。しかしながら、従前建物の削平により造構面全体が削られ、造構などは検出することができなかつた。

4. 出土遺物

土器

出土した遺物は、南側の流路もしくは湿地状になった地点で出土している。南半部は前述したとおり、湿地状の堆積になっており、複雑な堆積になっていたため、堆積層を順に掘削しながらの調査はできなかつた。しかしながら、湿地状堆積の上層には、古墳時代から平安時代末までの遺物が堆積しており、下層には弥生時代の遺物しか出土しない。北半の安定した造構面と段との境には集中して流路が3条検出されたが、流路内からは少量の弥生土器の小片が出土するのみであった。それらの流路の下層には段まで覆う大きな旧河道があり、その中間層より弥生土器が4点出土した。これらは、比較的近くで出土しており、小さめの土器であることや、表面が摩滅していないことから、出土地点近くの段上で、水辺の祭祀が行われた可能性がある。

出土した弥生土器は、いずれも小型の壺である。(図14-4)は、出土した中で大きいものであるが、頭部には3条の凹線紋を施している。体部には、縦方向の刷毛目調整を施している。弥生時代中期初頭のものと考えられる。

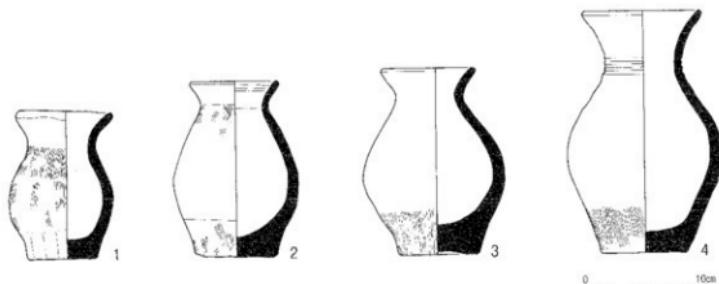


図14 第41次調査出土土器

石鏃 石鏃と認定できたものは1点(図15-1)のみで、サスカイトの打製である。形状は平基式であり、出土状態は、包含層の出土であるため、時期を限定し得るものがない。

石錐 (図15-2)は石錐である。サスカイト製であり、形状としては頭部と錐部に明確な区分がなく、逆三角形を呈している。錐部は使用による摩滅痕が顕著である。

楔形石器 (図15-3)は、一辺の両側面に調整を施して刃状にした形状であることから、楔形石器と分類されるものである。楔形石器は、刃部の対端が面状になっているものがあり、その一部に敲打痕を残しているものがあることから、楔のように使用されたものと考えられている。今回の楔形石器には明確な使用痕は見られない。

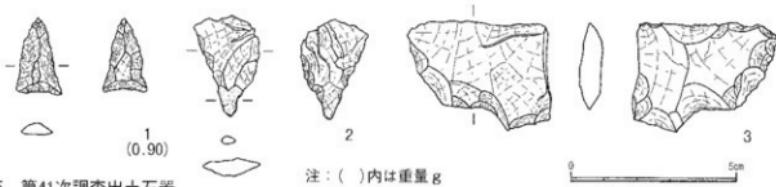


図15 第41次調査出土石器

注: ()内は重量 g

石庵丁未成品 (図16-1)は周縁部を打ち欠き、石庵丁としての形態をほぼ整えた状態のものである。

三分の一が欠損しており、製作過程で損壊したものと考えられる。直線辺と湾曲辺ともに鋭くなっているため、刃をどちらに設けようとしたかは不明である。表面については、両面とも研磨されたような痕跡は見られない。石種は、緑色結晶岩であり、比重は3.034である。

(図16-2)も周縁部を打ち欠き、石庵丁としての形態をほぼ整えた状態のものである。二分の一が欠損しており、製作過程で損壊したものと考えられる。石種は、流紋岩と考えられるが、表面には石材のもつ水泡状の窪みが多数みられ、両面とも研磨されたような痕跡がないことから、厚みはもう少し薄く仕上げる仕様と考えられる。比重は2.364である。

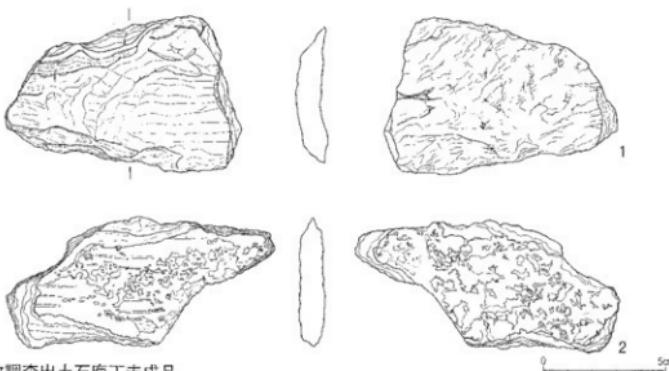


図16 第41次調査出土石庵丁未成品

第4章 まとめ

今回の調査では、遺跡周縁部での自然流路を検出した。この自然流路は、当地域の特徴である六甲山南麓地域での河川のあり方を考える上で、貴重な資料といえる。

当遺跡の西に流れる渓川は、時代によって大きく旧湊川成立以前の川、旧湊川、新湊川に区分される。新湊川は、明治29年の大水害を受けて付け替えられたものであり、明治34年に新湊川として現在に至っている。それ以前は、埋め立てられた天井川であった旧湊川で、その流れは現在の湊川公園や新聞地の区画に明確に残されている。旧湊川成立以前の

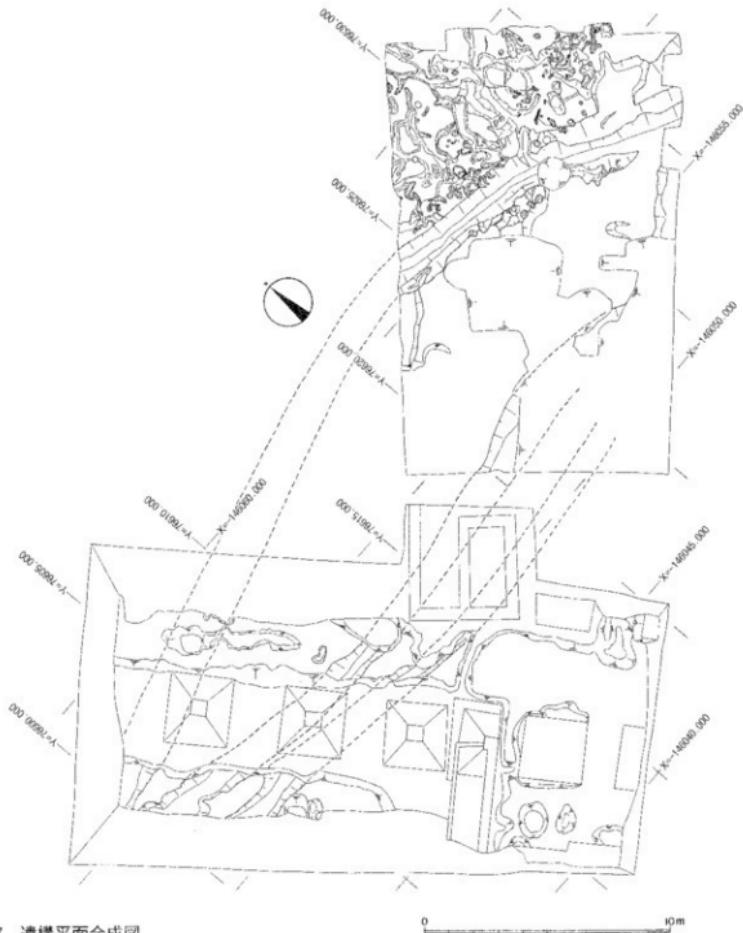


図17 遺構平面合成図

川の明確な流れは現在把握することができないが、急峻な六甲山系から流れ出した雨水は、地形の低い筋を探しながら網の日のように海へと流れ込んだものと考えられる。兵庫区から長田区にかけては上沢や三川口などの水に関する地名が散見されることもそれを窺わせる。このように湿地が点在する地帯は、源平合戦では自然の要害となり、湊川の戦いでは、足元が悪くなるため大多数の敵を少人数で囮乱するなどの理由から戦場となつたと考えられている。

今回検出した流路群は、いずれも幅1m前後で深さが30cm前後的小規模なものであるが、第40次調査の平面図と第41次調査の平面図を合成した図17で示したとおり、ほぼ東西方向へ流れる流路の方向性が現れてくる。流路の流れた時期については、出土遺物としては弥生土器が多く見られるが、古墳時代や平安時代末の遺物も見られることから、最終埋没は平安時代末頃と考えられる。

上述したように、当地区での土地形成を古い段階から順に考察する。まず、縄文時代晩期から弥生時代にかけては、安定した集落域として、一段上がる安定した土地に形成され、段下には、集落域を取り巻くように湿地（後背湿地）が存在しており、この湿地が海岸まで続いているものと考えられる。不安定な湿地状の土地が徐々に埋まり、最終的には幾筋かの小流路が平安時代末まで流れているものと考えられる。

湿地が埋まる過程での小流路は、すべてが座標軸の東西方向に流れおり、流路底の標高差から流路は西から東に流れていると考えられる。旧湊川成立以前の川は、川筋が定まっていなかったと考えられることから、当該地区から東へ流れる河道が存在したものと考えられる。

今回の調査地点は、楠・荒田町遺跡の南西端にあたる地点である。遺跡の周縁部には幾筋もの流路が流れながら、南に広がる湿地帯を徐々に埋めている過程を知る資料を得られた。また、縄文時代から中世に至るまで安定して集落が営まれている土地と、湿地とを隔てる土地の段差を検出した。これは、遺跡の範囲を規定する境ともなり得、今後周辺の調査では、この段差を境としてどのような集落の様相が展開されるかを注目すべきである。



1. 第40次-1 2区全景（西南から）



2. 第40次-1 2区南壁及び段落ち（北から）

写真図版 2



1. 第40次-2 西半全景（北から）



2. 第40次-2 東半全景（南から）



(図 7-1)



(図 7-4)



(図 7-2)

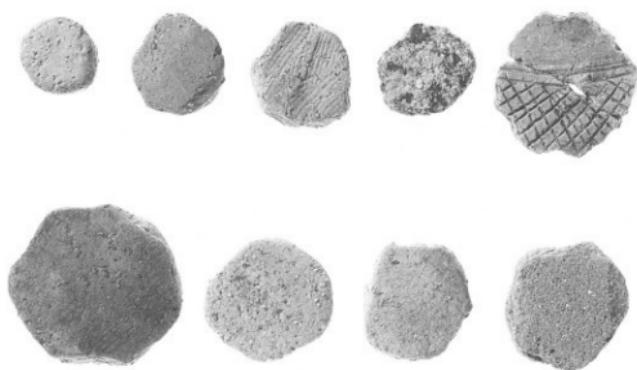


(図 7-3)

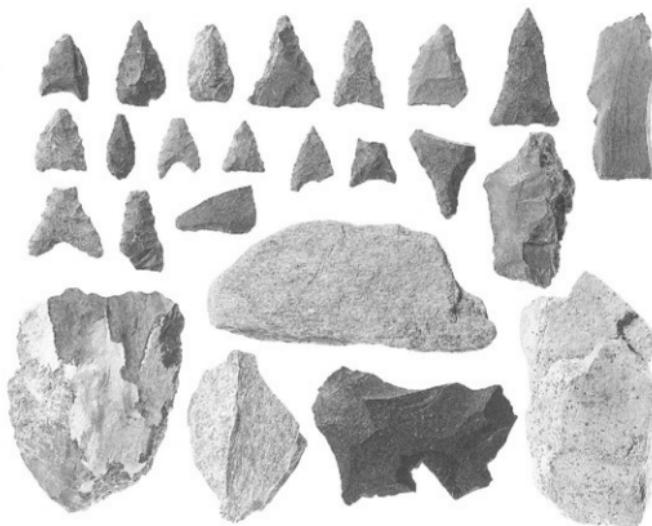


(図 7-5)
第40次出土土器

写真図版 4



1. 第40次土製円板



2. 第40次石器類



1. 第41次南半全景（北西から）



2. 第41次北半全景（南東から）

写真図版 6



(図14-1)



(図14-3)



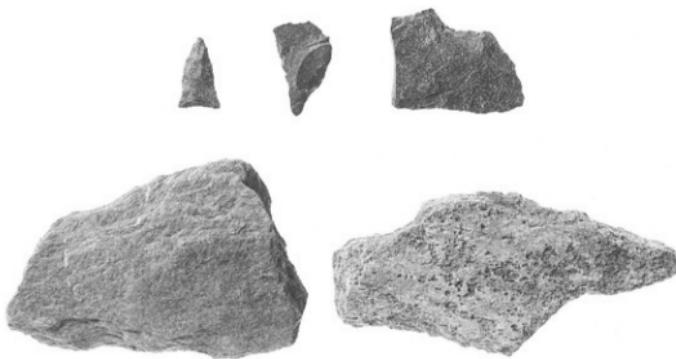
(図14-2)



(図14-4)
第41次出土土器



1. 第41次出土土器集合写真



2. 第41次石器類

報 告 書 抄 錄

ふりがな	くすのき・あらたちょういせきだい40・41じはくつちょうさほうこくしょ						
書名	楠・荒田町遺跡第40・41次発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	川上厚志						
編集機関	神戸市教育委員会						
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-6480						
発行年月日	西暦2008年3月31日						
所収遺跡名	所在地 市町村	コード	北緯	東経	調査期間・調査面積	調査原因	
		遺跡番号					
楠・荒田町遺跡	兵庫県神戸市 兵庫区福原町 32番-9、18、19 番4、5、6	28105	03-23	34度 40分 50秒	135度 10分 10秒	(40次-1) 平成19年5月16日～ 平成19年6月5日・100m ² (40次-2) 平成19年8月21日～ 平成19年8月31日・100m ² (41次) 平成19年7月30日～ 平成19年8月21日・200m ²	ホテル建設 (40次調査) 共同住宅建設 (41次調査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
楠・荒田町遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代	弥生時代 平安時代	自然流路	縄文土器 弥生土器 須恵器・土師器		
要約	楠・荒田町遺跡の南西端にあたる地点の発掘調査となり、遺跡の周縁部の流路が筋跡も形成されながら、南の湿地帯へつながる状況と集落が形成される安定した土地との境界を検出						

楠・荒田町遺跡第40・41次発掘調査報告書

2008. 3. 31

発行 神戸市教育委員会文化財課

〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印刷 水山産業株式会社

〒653-0012 神戸市長田区一番町3丁目4番1号
TEL 078-577-3757